

文化変容と社会組織

——ミクロネシア・ヤップとパラオの場合——

青 柳 まちこ

ヤップもパラオもミクロネシア・西カロリン群島に属し、両者の距離は約四八〇キロ、現在ではジェット機で一時間足らずの近さにある。かつて両島の間には密接な交流があり、有名な石貨を切り出すために、ヤップ人は隊伍をくんで、パラオのマラカル地方まで遠征したという。しかし現在、ヤップとパラオは外来文化の受容という点で、いじちるしく差異がある。空港ですら上半身裸の禪姿の男たちをしばしば見かけるヤップと異なつて、パラオの首都コロールの町には、いたる所車が砂ぼこりをまき散らして走りまわり、洋風住宅の建築もさかんで、経済的に裕福な人びとの家の内部には、全くアメリカ風の便利な設備が備えられている。両島の基本的な産業は、コブラと高瀬貝でそれほど大した差がないように思われるのに、このように外来文化の受容における差異が、わずか四八〇キロしか離れていない二つの島の中で生じているのを、どのように説明する

ことができるであろうか。先に私はパラオにおいては、母系氏族成員相互間の助け合いを初めとする、各種の助け合いが、高価な物品の購入（とくに家屋）に有効に作用することを考察した。⁽¹⁾パラオに比べると、ヤップ社会は余りにも個々人の孤立性が強いように見える。そしてこのようなヤップの社会組織が、外来文化の受容にも、かなり大きな影響を与えているのではないかと想像される。したがってこの小論では、ヤップの文化変容と社会組織について、折々パラオとの対比をとりまぜながら、考察していきたいと考える。

一 外来文化との接触

まず第一に現在までに両島がどの程度外来文化に接触してきたか、その歴史を簡単にふりかえってみたい。

(1) スペイン時代以前

カロリン群島中、パラオ諸島は一五二七年ゴメス・デ・セケイラ (Gomes de Sequeira) 、ヤップは一六八六年フランシスコ・ラツェアノー (Francisco Lazano) というスペイン人によってそれぞれ発見されたと伝えられる。スペインはすでにマリアナ群島を正式に領有し、グアムを根拠地にしてカトリックの布教を開始していたが、それより南の島々については大した関心を払わなかったようである。十九世紀半ばになると、パラオおよびヤップには、中国輸出向のなまこ採取を目的とした商人が、多くやって来るようになった。一八六九年には有名なドイツのゴットフロイ商会 (Godeffroys) がヤップに支店を設け、間もなくヘルンスハイム商会 (Hurnsheim) も進出してなまこのほか、コブラの貿易に従事した。また米国人オキーフ (D.D. O'Keefe) は、パラオからきり出す石貨をヤップへ運搬することによって多額の利益を得たと伝えられる。パラオはこの頃英国海軍と交渉があり、数回も難題や攻撃をかけられたが、これに比べるとヤップは比較的平穏であったようである。

(2) スペイン時代 (一八八六—一八九九)

十九世紀後半帝国主義の風潮がさかんになるにつれて、各国は太平洋各地の小島についても領有を主張するようになった。ドイツは早くから南太平洋の各地で商業活動に従

事してきたが、スペインは一八七四年、この地で商取引をする外国船は、まずフィリッピンに來航して政府の許可証を受け税金を納めることを定めた。ドイツはこの規則に應ぜず、むしろこれらの島々を自国の保護の下に置くことをスペインに通告したので、スペインは激昂した。そしてスペインは軍艦を派遣しようとしたが、ドイツ海軍は機先を制してヤップに上陸し、一八八五年ドイツ国旗を掲げた。この事件は本国で暴動を引き起すほどの大事件に発展したが、ドイツのビスマルクはこれをローマ法王の裁定にゆだねた。法王はこれらの島々についてのスペインの主権を認め、一方ドイツには商業、農業、航海その他すべての自由を認めるという裁決を下した。以後スペインはこの地に若干の宣教師、官吏、軍人などを派遣したが、国力に余裕があるわけではなかったので、依然としてドイツ人が活発な産業活動が続けていた。スペイン時代はわずか十余年で終りを告げるが、この間のスペインの影響は宗教に限られていたといえよう。

(3) ドイツ時代 (一八九九—一九一四)

米西戦争で敗退したスペインは、マリアナ群島・カロリン群島を、二五〇〇万ペセタで一八九九年ドイツに譲渡した。ドイツは同年六月、勅令でこれらの植民地を、既設のノイ・ギネア政庁の所管の下に移した。ドイツはミクロネ

シアを東西に分けて、すでに統治下においていたマーシャル群島、ナウル島、および購入したカロリンのトラックを一区画としてポナペに政庁を置き、西部はヤップに政庁を置いて、その下にパラオ、サイパン、アンガウルの各支庁を置いた。ヤップはドイツ時代の行政の中心となったが、ドイツは原住民にそのまま統治させる方針をとっていたために、駐在する官吏の数は少なかった。ドイツ人口が最高の数値を示したのは、ドイツ統治時代の最後、一九一三年であるが、それでもマーシャルを含めて二五九人であり、ヤップとパラオだけならそのうちの半分弱であろう。

カトリックの布教中心であったスペインと異なり、ドイツの政策は、植民地が本国の経済発展に役立つよう開発することであった。そのため資源の探索にはきわめて熱心であり、パラオの南端アンガウル島に燐鉱石が発見されると、その採鉱のためにブレーメンに南洋燐鉱株式会社設立された。当時この会社で働いていた従業員はドイツ人十名、中国人百名のほか、ヤップとパラオからの強制出稼ぎが多数あったといふ。

経済開発のもう一つの柱は、コブラの生産である。以前からマーシャル方面で活動していたヤルト会社がおキーフ商会を合併し、西カロリン会社としてコブラの輸出に従事した。政府はコブラの増産のためには椰子の木を増殖す

る必要があるとして、椰子樹の管理を厳命し、ヤップでは成年男子に毎日四本ずつの椰子苗を強制的に植付けさせた。⁽⁵⁾
一九一三年当時、コブラの輸出量はパラオで四七、〇六二トン、ヤップで一三二、六四五トンであった。輸出先はヤップが生産量の四分の三を宗主国ドイツに向けていたのに対し、パラオはそのほとんどすべてが日本向けであった。宗教教育方面では、スペイン人宣教師にひきつづいて、同じカプチン派に属するドイツ人宣教師が伝道を行なった。彼らもスペイン人と同じくキリスト教以外の宗教を禁じたが、教育方面にも心を用い、村々の教会には付属学校を設け、子供たちの教育に当った。ヤップにはこのような学校が四校あり、学級は一年から五年まで、入学年齢は八歳で、学用品は無償貸与した。科目は宗教、読書、算数、ドイツ語、地理、図画、音楽で、とくにドイツ語の教育には力を入れた。学校ではなるべくドイツ語を用いるようにし、三年級以上の授業には必ずドイツ語を使用した。⁽⁷⁾一九三四年ヤップを視察旅行した矢内原は、村長らが多くドイツ語を解して便利だったと述べている。⁽⁸⁾

(4) 日本時代 (一九一四—一九四五)

i 日本人人口の増加

第一次大戦にドイツが敗退したことにより、旧ドイツ領

第1表 日本人と原地人の人口の増減⁽¹⁰⁾

	日 本 人		原 地 人	
	ヤップ支庁	パラオ支庁	ヤップ支庁	パラオ支庁
1920	97	592	8,338	5,754
22	132	585	7,730	4,720
23	140	711	7,864	5,770
24	140	873	7,893	5,717
25	156	1,054	7,366	5,957
26	171	1,376	7,230	5,763
27	215	1,545	7,108	5,698
28	216	1,685	6,566	5,891
29	245	1,815	6,545	6,043
30	241	2,078	6,486	6,009
31	283	2,489	6,410	5,882
35	633	6,553	5,829	6,013
40	1,933	25,768		

であったミクロネシアのうち、ナウルを除いた島々が、日本海軍の統治下に入った。一九二四年日本は国際連盟によるミクロネシアのC式委任統治国となり、その年パラオのコロールに南洋庁が設置された。

距離的に遠隔の地にあったドイツが、ごくわずかのドイツ人官吏でこの地を管轄していたのに対し、委任統治以後の日本人の増加はめざましかった。第一表は一九二〇年以

大体においてパラオを押さえていたようである。その他高瀬貝もヤップの主要な移出品であったが、これはパラオにははるかに及ばなかった。

鉱業についてみると、アンガウルのドイツ南洋燐鉱会社は、日本政府によって売却され、南洋庁採鉱所として、操業が続行されており、南洋庁の主要な財源となっている。⁽¹⁴⁾ 労務者の募集は、ドイツ時代と同じく出稼誘致であったが、一九二八年度の例でみると、パラオ支庁からの雇入労務者六七人に対して、ヤップ支庁からは二八八人である。これら労働者募集の方法は、募集地の首長その他の有力者を仲介として希望者を申出させ、採鉱所と本人との間の自由契約とした。彼らは、採掘運搬などの一般労務に服しており、いずれも単身出稼ぎであり、その雇用期間は六ヶ月から一年の短期である。⁽¹⁵⁾ またパラオ本島西部のガラスマウにも、南洋アルミ会社がボーキサイトの採掘を開始した。ここでの現地人労務者は三〇〇名に上り、パラオ人のほかヤップ、トラックからの出稼ぎも多かった。

ドイツ時代からすでに日本人はマリアナ、パラオ方面で商業に従事するものがあつたが、それらの中でもっとも歴史が古く大規模なものは南洋貿易会社であった。南洋興発の事業がマリアナの製糖業を主体として、各種の工業に力を入れていたのに対し、南洋貿易は群島内各地に支店を設

後のヤップおよびパラオの人口統計である。一九一四年の海軍占領当時は、南洋全体の日本人が七、八十人であつたといわれるから、その年ごとの増加が知られよう。

南洋庁の所在地パラオ人の日本人人口の増加はもちろんであるが、ヤップでもわずか十五年間に七倍になっている。また現地人自身の人口が減少しているのので、日本人人口の相対的割合はいっそう高まっている。そして来島した男女の比率はヤップもパラオも男子が女子の約二倍であつた(たとえば一九三五年統計ではヤップ男四二三名、女二一〇名、パラオ男四、三二五名、女二、二二八名)。⁽¹⁶⁾ こうしたことは必然的に日本人男子と現地人女子との通婚をうながしたろう。

ii 産業

日本もドイツのあとをうけて、産業の開発にはきわめて熱心であつた。一九三二年、日本人の職業人口は三万人をこえたが、その内訳は、農業五〇・一%、水産業七・九%、鉱業〇・一%、工業一三・七%、商業一一・〇%、交通等二・六%、公務自由業四・五%、家事使用人一・三%、その他八・八%という割合であつた。

ドイツ時代よりココ椰子の生産がさかんであつたヤップは、日本時代になつてもパラオの二倍以上の生産面積を保有しており、日本への移出量は年々消長はあるにしても、

け、コブラ、高瀬貝の買付、商品の販売、廻船など多角的経営に携わつた。日本人人口の多かったパラオのコロールには、日本人商店が軒を連ね、日本人が通常必要とする商品は、ほとんどすべて移入され販売されていた。それらの中で現地人の好む品物は、化粧品、缶詰、米、煙草、布などであり、これらはすべて日本本土より割高であつたから、現地人にとっては著しい贅沢品の部類に属したものである。一方収入の方は、労賃の規準は各種の職業において日本人より現地人の方が低く、またパラオよりヤップの方が低かつた。⁽¹⁷⁾

総じて産業は多数の日本人移民が渡島滞在したこと、南洋庁が試験場や物産陳列所、あるいは各種の奨励金や補助金を日本人、現地人両者に交付して積極的に後援したことで、また南洋興発、南洋貿易、南洋庁などの大資本が介入したことなどの理由により、質量ともにドイツ時代より飛躍的に発展するはずであつた。しかしその努力が糸口についたばかりで本格的に実を結ぶ以前に大戦に突入し、水泡に帰ってしまったのは皮肉なことであつた。

iii 教育

日本人子弟と島々の子供たちとは分離教育が行なわれ、前者を小学校、後者を公学校とよんだ。小学校はヤップに一校、パラオに一校(高等科も含む)設置され、公学校は

ヤップに三校(コロニア、ニフ、マキ)、パラオに五校(コロール、マルキョク、ガラルド、ペルリユー、アンガウル)にあり、それぞれ日本人の教員がその任に当った。公学校は八歳以上、三年間の義務教育で、徹底した日本語訓練が行なわれた。二年以上になると学校で原地語を話すことは禁じられ、その掟を破ると厳しい罰が与えられた。現在流暢な日本語を話す人が多いのは、この時の教育の結果である。コロニアおよびコロールの公学校には補修科二年を設け、さらに学びたい子供を受入れた。

一九二六年には、パラオのコロール公学校に、木工徒弟養成所が設置され、建築や木工の仕事に従事しようとするものに対しては、特別の職業教育がほどこされることになった。この養成所には、補修科終了以上の成績優秀な男子が、群島各地からほぼ人口に応じた割合で、入学した。このように木工の技術をとくに重視したのは、建築に必要な技術を修得させ、住宅改善をするのが、生活上の最短距離であろうという判断に立っていたからと思われる。南洋庁のこうした方針は、少くともパラオにおいてはもっとも効果を発揮し、従来のニッパ椰子やパンダナスの葉で編んだ住宅は、次第に日本式の住宅に建てかえられるに至った。

日本人教師による教育は厳しく、しばしば鞭による体罰

も加えられたそうである。本科あるいは補修科を卒業すると、日本人家庭に住みこんで、通常は一年間傭人として働いた。これは日本人関係の職場で働く際に必要な、日本語や日本人の風俗習慣になじむために奨励されたい。強制ではなかったようであるが、現在多くの人がこうした経験を語っていた。

宗教に関しては、当初から日本政府は重要視し、ドイツ人カトリック宣教師の撤退後、同じ派のスペイン人宣教師を入れてその布教に従事させた。これは委任統治という新領土の性質上、キリスト教の伝道に力を入れることが、諸外国に与える心証をよくするために必要であると判断したためであろう。しかしカトリックの影響の強いマリアナ群島や、早くからプロテスタントの宣教が開始された東部カロリンとは異なっており、ヤップやパラオでは、新旧ともにその影響はそれほど大きくはなかったようである。キリスト教以外では、一九二六年真宗大谷派が、また一九二九年には天理教が、それぞれコロールに布教所を設け、また、一九四〇年には南洋神社も作られた。しかしこれらが原地人に与えた影響は疑問である。ヤップではカトリックの教会一つが存在するのみであった。

このように日本時代になって、パラオが行政の中心となるに及び、外来文化と接触する度合は、ヤップとパラオで

は非常に異なるに至った。ただ一つヤップがパラオに比して、主要な地位を占めていたのは、通信の面である。ドイツはすでに一九〇五年オランダと共同して、ヤップを基点とする三線、ヤップ—メナド間、ヤップ—グアム間、ヤップ—上海間の三線の海底電線を布設しており、これはドイツの植民政策に多大の利益をもたらした。⁽¹⁹⁾日本時代になって以後は、上海線の一部を沖縄那覇に陸揚げして、ヤップ—那覇間二、八七七キロの無線が、日本本土と南洋群島間の電信連絡に当てられた。⁽²⁰⁾

(5) アメリカ時代(一九四五—現在)

ミクロネシア各地を焦土の戦場と化した第二次大戦は、またもやこの地の統治国を変更した。新たに国際連合の委任統治国となったのは、アメリカ合衆国で、ミクロネシアは、四度目の支配的な外来勢力と接触する運命になったのである。

アメリカの統治方針は、ドイツや日本がミクロネシアの経済開発を第一の目標にかかげたのとは対照的であった。資源豊かであり、かつ遠距離にあるアメリカ本国はその必要を認めなかったであろう。アンガウルの燐鉱山ももはや廃鉱と化してしまった。また日本が大量の官吏を導入して直接統治を計り、またそれに伴って多くの一般移民が渡島したのに対して、アメリカは少数の官吏と教員その他を

配置しただけであった。さらにアメリカ統治後は、サイパンにハイコミッションの中央政府が設置されるようになったために、パラオは日本時代に占めていたミクロネシアの政治的中心地からはずされた。ハイコミッションは、各地区の行政責任者にミクロネシア人自身を登用する方針をとり、高等教育を受けた適任者たちを次第に高位につけている。現在では各地区で最高の権力を持つ地区行政官も、すべてミクロネシア人ないしはチャモロ(ヤップの場合)が任用されている。こうしたことは、サイパンは例外としても、その他の地区では原地住民にとって、宗主国の外来者たちと接触する機会が激減したことを意味する。

しかし一方ではケネディ以来、平和部隊の青年たちが、教員として、あるいは何らかの技術者として、島々に継続的に配置されるようになった。彼らは原地人とともに生活し、原地語を習得するよう求められている。そのために、日本語は強制したが、原地語の習得にはいたって無関心であったかつての日本人とは異なり、別の形で原地人がアメリカをよく知るようになったということは否定できない。

また外国への奨学金の拡充によって(とくにパラオでは私費も含めて)、アメリカ留学生の数が異常なほど増加しているのが目につく。彼らの中にはそのまま帰国せず、外地で就職したり、アメリカ人と結婚してそのまま留まるも

の多い。また平和部隊やアメリカ海岸警備隊員などと結婚して、島を離れる人もある。こうした形で外地に滞在する人が増加したことは、国際結婚の多かった日本時代にも見られないことであった。

商店の店頭に並べられている品々も、米、砂糖、石けん、インスタント・コーヒーなど、アメリカ製の物品が多くを占めるようになってきた。上映される映画も近年は次第に日本画より洋画が多くなっている。中年以上の人びとは、「アメリカの言葉はわからないから日本のカチドウ(活動映画のこと)の方がよい」とはいいながらも、他に娯楽がないので洋画を一心に眺めている。若い人にとっては、英語の出来、不出来は、将来の生活を左右する要因ともなるので、英語の習得にはきわめて熱心である。

このような形で、現実には肌をふれ合うアメリカ人の数が少ない割には、アメリカ化はかなりの速度で進行しているように思われる。

二、ヤップの衣食住

(1) 六十年前のヤップ

日本海軍は南洋群島を占領して間もない一九一五年、統治の必要から各守備隊長および分遣隊指揮官に、島々の風

く。輸入品の布を用いる人もいる。締め方は年齢により異なる。

2 女子の腰衰 オンと称し、ひざまでのもの、足の甲までの長さのものがある。その材料は年齢により異なる。上半身は裸体である。

3 結髪 男は十四歳頃から頭髪をたくわえ、十八、九歳で結髪して櫛を用いる。

4 指輪・腕輪・足かざり 男女とも十二歳頃に達すれば指輪を使用し、腕輪をはめる。男子は十七・八歳に達すると足くびにモクモクと称する飾りをつける。

5 鼻隔穴・耳朶穴 男女とも十二歳頃から耳朶に穴をあける。また老人には、鼻の隔壁に穴を穿つものがあったが、近時は髭の流行のため次第に少なくなっている。

6 文身 男女とも十四・五歳頃から文身を始める。男子のヨウルと称する全身文身は二十四・五歳で行なう。女子は三十歳以上になると陰部付近まで文身を行なう。

7 お歯黒 初経後九日目に歯を黒く染める。

8 首飾り お歯黒と同時に「マラファオ」とよぶ黒い紐を首にかける。

住

9 家屋 土台は地面から一間ばかりの高さに土を盛り、周囲を珊瑚礁で積み上げて石垣のようにし、長方形の

文化変容と社会組織(青柳)

俗習慣の調査を命じ、報告書を提出させた。これが日本時代初の調査報告書である。伝統文化と一口にいうが、それらといえども長い時間の間にはさまざまな変化を蒙っている。したがって文化変化を考察する場合には、何らかの基準になる点があることが望ましい。その意味でこの海軍による報告書はきわめて有効であるといえよう。何故ならばこの報告書は、調査時期が一定している上、いわゆる専門家の手によるものでないだけに、解釈や推論的復元を加えることなしに、見たまま聞いたままを非常に素朴な形で提出しているようにみえるからである。しかしこのような報告書の性質上、信仰、社会組織など目に見えない部分では、聞き誤りや、偏見誤解など多いのではないかと危惧される。したがってここでは、専門家でなくても比較的容易に観察、記述できると思われる衣食住について、その技術面と慣行面に絞って取り上げてみよう。

守備隊の報告は大項目で羅列的に記述されているが、現在との比較の便のために、二十項目に整理し、当時のヤップの状況を簡単に述べておく。

衣

1 男子の褌 ヤップ島民は衣服を着用せず、裸体で、男は六尺褌を締めている。これは芭蕉の繊維で織った長さ六尺、巾一尺位の織物で、土または染粉で簡単な模様を描

土台を作る。材料はタマナの木材と、女竹を併用する。屋根は竹を組み合わせ、タコの木で葺く。屋根の勾配は急で、地面と約五十度の角度で長く垂れ下る。家の周囲は一方を出入口とし、他はすべて竹垣でふさぐ。内部は区切りがないので一室となっている。床板は割った檳榔樹の幹を地上に並べたもので、床下はない。

10 女性の寝所を別とする 一家の戸主は、その主屋に起居するが、主婦はその付近に建てた小屋に眠る。それは土台も床もない高さ一間、建坪二坪ほどの小屋で、竹材で囲いタコの葉で葺いてある。

11 便所 便所はとくに設けない。大部分の者は海岸の石垣の中途から行ない、椰子果の内皮で紙に代用する。女性には水中で用を足し踵で不浄部を洗う。山間部では雑草の中で用を足す。

12 月経小屋 人家よりやや離れて、月経中の女子が起居する共同の小屋(ダバル)がある。ここには男子は近寄ることはできない。

13 集会所 集会所は一般の住居と同じ型式であるが、はるかに広大である。男子は十歳位から一人前となるまで、集会所に起居するのが常である。

14 モゴリ モゴリは集会所に住みこんでいる女性で、身体に黄粉を塗り、歌舞を行ない、若者の会話の中心

となり、また望に応じて房事を行う。モゴリを迎えようとする場合には、なるべく遠い村の娘を探し、両親に贈物をしてその村に連れてくる（モゴリはドイツ時代各村に三、四名いたが、この時は一村に一、二名いたようである）。

食

15 常食物 常食物は、ラーク、マル（以上芋の名）、椰子の果実、オチョップ（椰子果の汁）で、トーク、カモテ（共に芋の名）、パンの実、ポーイ（栗のような物）、グルグル（蜜柑に似たもの）、魚類および豚肉がこれにつぐ。

15 檳榔樹 嗜好物の第一としてブー（檳榔樹）があり、この実を半分、または四分して、石灰を振りかけ、ゴボイ（キンマの木の葉）で包み口に含む。

17 椰子酒・椰子蜜 椰子の軸芽が開花する際、この軸芽を切ると一日に約一リットルの汁がとれる。これを貯えておくと四、五日して醗酵し、九日ほどすると烈しいアルコールを帯びる酒となる。十五日目にもっとも烈しく醗酵する。これをウコウコンという。醗酵前に煮詰めると、水飴のような甘い液体となる。これをリッチといい、老若男女に好まれている。

18 土器・木皿 鍋は土で作った素焼で、使用民（五等民―後述）の女子が作る。木皿は木をえぐって作った足付きのもので、楕円形をしている。

理由はアルコール対策のほか、椰子の軸芽を傷つける椰子酒の製造によって、輸出商品であるコプラの生産が減少することを恐れたためである。⁽²³⁾ 日本政府もアルコール禁止の政策をとったが、椰子酒を作る前の液を煮つめた椰子蜜は栄養に富み、とくに老人、乳幼児にとって必要な食品であるということと、哺育上必要と認められる場合に限り、医院の証明書を発行し、乳児一人につき椰子樹一本の椰子蜜製造を許可したそうである。⁽²⁴⁾ アメリカ時代になってからはもちろんこの制限は撤廃された。

ドイツ政府が、どちらかといえば罰則という形で旧慣を廃止しようとしたのに対し、日本政府は奨励金や補助金などにより新しい事物を導入しようとしたようである。とくにヤップ島の極端な人口減少は、島民の非衛生的な生活環境にあるとして、住宅の改善、便所の設置などを勧めた。一九二二年以降、各地で木工木挽の講習会を開くなどして建築技術の普及に努め、また模範家を考案し建築している。⁽²⁵⁾ これがパラオの木工徒弟養成所に発展したのは前述の通りである。

便所に関しては、海岸地方では海に突出した小屋を作り、排泄物を直接海中に落下させることが望ましいとして、人口密集地では共同便所を作るのに奨励金を出し、個人で便所を新設しようとするものに対しては補助金を出した。⁽²⁶⁾

19 女子の耕作 夫は銚え煙草で日を送るが、妻は芋畑に出て食物を求めることにつとめる。

20 男女の調理別 男子は女子の鍋で煮たものは不潔であるといって一切食べない。

以上がヤップの衣食住についての海軍守備隊の報告を、整理抜粋したものである。この報告はサイパン、ヤップ、パラオ、トラック、ポナペ、ヤルートの六地区にわたっているが、これらの中で当時もっとも西欧化しているように思われるのがサイパン、次いでヤルートであり、これを除くと他の四地区はほとんど差がない。

(2) その後の変化

次にこれらについて、その後の変化を考察しよう。

ところで、上述の諸項目はそれぞれ異なる特性や背景を有している。たとえば統治国によって禁圧されたもの、あるいはその反対に奨励されたものがある。そのもっとも代表的なものはメスピル（前述のモゴリ）で、これはスペインの領有以来、キリスト教的立場から厳禁され、ドイツもその方針を継承した。ドイツはそのメスピルの温床であった男子集会所そのものをも禁じたそうである。⁽²⁷⁾ それは男子集会所が、村同士の戦闘の単位として、内戦に深い関係を持っていたと考えられたためでもある。

椰子酒の採取はドイツ政府によって禁じられたが、その

月経小屋は非衛生的なため、同様に補助金を出して整理改造したという。⁽²⁷⁾ これがこの慣行そのものに対して、続行の要因として働いたのか、あるいは廃止方向の要因として働いたのかは明らかでない。一方ドイツ政府が廃止しようとした集会所に対しては、日本政府は風紀上からの改善を勧告して、むしろ修築や新設の場合には補助金を出している。⁽²⁸⁾

衣服はキリスト教宣教師が熱心に着用させようとしたが、マリアナ群島とは異なり、キリスト教の影響が少なかったヤップでは、その効果はほとんどなかったようである。日本時代になって、南洋庁は公学校の生徒には必要に応じてシャツ、ズボンを給付したという。⁽²⁹⁾ 年代は不明であるが、当時の「ヤップ島民改善講習会の状況」と題する写真を見ると、出席者十三名のうち三名がシャツ状の物を着ているようである。⁽³⁰⁾ 鼻隔壁の穴、耳朶の穴、文身といった身体加工や、お歯黒などについては、日本政府がどのような対策をとったか記載がない。

また、ここにあげた二十項目中には、単なる慣行のみのものもあれば、技術や物品が関係する事柄もある。そして後者の中には、古い物を捨て新しい物を導入するために現金を必要とする事項もある。たとえば腰袋は誰でも容易に材料を得ることができるし、また製作することができる。

しかし、木綿のワンピースではその素材を作り出すことはできないし、物々交換や石貨、貝貨では購入できない。新型の家屋の建設、便所の設置(材料によっては費用はかかるが)、新しい食品の導入、鉄鍋や陶器の皿を使用し始めることなどにおいても、現金が必要となる。また文身や鼻の隔壁穴のように一度施したら生涯消えないものもあるし、結髪や首かざりのように、他に代替品を必要とすることなしに、その日からでも取り除くことができるものもある。

次に前述の二十項目を、一九七三年の調査時にヤップ島G村で見聞した実態に従って、次の四種に分類してみよう。

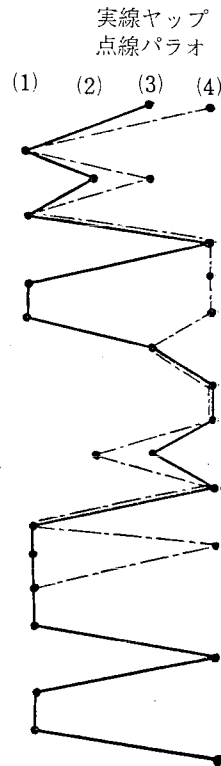
- (1) 村人のすべて、もしくはほとんどすべてが、現在もなお保持している物質、技術、および慣習。物質が保持されているという場合、骨董品としてではなく、使用されていることを意味する。
- (2) 村人の大部分が現在もなお保持している物質、技術、および慣習。
- (3) 村人の一部(その多くは老人であろうが)のみが現在もなお保持している物質、技術、および慣習。
- (4) もはや村人の中で保持されていない物質、技術、および慣習。それらの中にはすでに人びとの記憶から消えてしまったものもある。

第二表は二十項目についての背景を、ある程度整理して表化したものである。プラスの記号は変化を促進する方向、マイナスはその反対を示す。たとえば植民地政府などにより、現存する慣行を奨励する政策がとられた場合は、変化しにくいと考えてマイナスの記号を付し、現存する慣行が禁止されたり、新たな別種の慣行が奨励された場合は、変化に対して促進の方向に働くと考えて、プラスの記号をつけている。

また第一図はG村における伝統的技術、慣行の保持の程度を示している。左側が(1)、すなわちもともと保持の程度が大きいもの、右側が(4)すなわちもともと保持の程度が小さいものである。ヤップG村と対照させるため、パラオ(22)の事例も併記しておく。

Aについて眺めるとヤップの諸変化の中で、政府の禁止政策により、完全に姿を消したのはメスビルである。これは人びとの昔語りにも、もはや出て来ない。しかし、メスビルを除くとプラスの記号を付したのも、それほど大きな変化はない。家屋についてみるとG村における十戸ほどの中で、伝統的なヤップ式家屋は一戸のみであったが、この変化は一部は新建材の導入もあるが、反面建築の手をぬいたり、規模を縮小するという簡略化の傾向もみられる。したがってこうした家から見ると、昔風のヤップ式家屋の方が

第一 図



※1 禁止の意の中には、他の事柄が奨励されるという消極的禁止も含む。

※2 ドイツ政府は禁止し、日本政府は奨励金を出して改善しようとしている。しかし、日本も風紀上の弊害があるとして禁止したことがあったようである。

※3 代替品はその大多数が現金を必要とすると考えるので、代替品を必要とするものは変化しにくいとしてマイナスと記している。

※4 一度身体加工したものは終生消えないので、この変化の速度はきわめて遅い。

第二 表

	(A)政府による 奨励(-)または 禁止(+)*1	(B)代替品必要の 有(-)または 無(+)*3
家屋	+	-
常食物	+弱	-
椰子酒・椰子蜜	+	-弱
檳榔樹		-弱
土器・木皿		-
榼	+弱	-
腰みの	+弱	-
文身		+*4
結髪		+*4
指輪、腕輪、足かざり		+*4
耳朶穴、鼻壁穴		+*4
メスビル	+	+
男子集会所*2	+(-?)	-
便所なし	+	-
女性による芋畑耕作	+弱	+
男女の調理別		+
男女の寝所別	(+)	+
月経小屋	+(-?)	+
成女の首かざり		+
成女のお歯黒		+

主として伝統的技術物質
に關係するもの

主として伝統的慣習に關係するもの

はるかに壮大である。便所はコロニアでは海水に直接投下の方式をとり、そのための小屋が海沿いに作られているが、G村では相変らず便所なしで事足りていた。月経小屋、若者小屋もそのままであった。女性の寝所を別とするという慣習は、日本式家屋の普及によって二次的に変化するであろうという見込みから、かっこ入りのプラスの記号を付したが、G村ではこの慣行が以前の程度まで実行されていたか明らかでない。あるいはここでは初潮以後の若い女性のみ別住であったかもしれない。いずれにせよ現在では夫婦は同室に就寝しており、また未婚の娘については、同一家屋内に居住しているものも、また親族の同年輩の娘とともに別の家に住んでいる例もあった。

食物に関しては、調理法も耕作法もほとんど変わらない。日本時代栄養改善のため奨励された緑葉野菜は、キウリ、ナスビなどの日本語にあとをとどめるのみで、積極的に耕作している人は少ない。ショウユ、ゴハンもよく使われる言葉ではあるが、日常食品として摂取しているわけではない。現在外来食品の中でもっともよく購入されているのは、インスタント・コーヒー、煙草、砂糖の類であろう。しかし嗜好品の王座はやはり檳榔樹で、これは男女老若を問わず常用されている。またかつて日本は、農業の振興のために、男子にも耕作を指導したが、それも実りはなかつた。

たようである。

Bでは代替品が必要とされ、しかもその代替品が現金を必要とする場合には、変化しにくいと考えてマイナスの記号をつけたが、この中で土器や木皿が全く消失してしまったのが目につく。これはこうした器具の製作者であった五等民(後述)の人口減少によって、実質的に不可能になったためかもしれない。衣服はズボン、シャツなどがかなり高価であるため、村人はコロニアへ出かける時は、それらに着かえるが、村では上半身裸の伝統的なスタイルで暮している。女性たちは常に手を動かして、腰みの用の葉を裂いている。

代替品を必要としないものはプラスで表わした。これは換言すれば即日廃止が可能な項目である。このうち文身、耳朶の穴は、老婆に見られただけで、いずれはなくなる運命にあるといえよう。この項目中、現在も大へんよく保持されているのは、成女のしるしである首飾り、女性の芋畑労働、男女の調理別、月経小屋、男子集会所での青年男子宿泊といった項目である。

六十年前の時点では、ほぼ等しかったヤップとパラオの生活は、現在では大きく変ってしまった。十五項目中、パラオが昔ながらの慣習を強く守っているものといえば、口常食物と檳榔樹、および女性の芋畑の耕作である。近頃で思われる。第一表および第二図において、変化しやすい条件をもちながら、伝統性保持の度合いが高い項目の多くが、そのような傾向を示すものであることは興味深い。誤解を恐れず単純化するというならば、パラオ人の価値は、他の人びとと協同するという集中型であるのに対し、ヤップ人の関心は、他人との区別を明らかにするという個別型であるように思われる。次にこのような個別型を支えているヤップの社会組織に若干ふれておこう。

三、ヤップの社会組織

(1) 分断される人間関係

部外者の目にはヤップは徹底した個別的社会であるように見える。社会組織は余りにも複雑に規定されすぎ、身分差が厳格で、個々人が対等につきあえる範囲はきわめて狭い。暗い森に掩われた人影の少ない森の中で、村人はひとりそりと孤立して生きているというのが、外来者に与えるヤップの第一印象である。まずヤップの人間関係を区切るいくつかの要因をあげてみよう。

i 村人としての区分

ヤップ全島には一二九の村があった。今でもこれらの村々の独立性はきわめて高く、断りなしに村に入ると、「誰

の許可を得てこの村に入ってきたか」という詰問を受ける。

さらに村々は八種の身分に格づけられている。本来この格づけは、戦争による勝敗の結果で、流動的なものであったといわれるが、内戦の終了に伴って固定してしまった。この八種の身分は日本時代、一等民(一、二位)、二等民(三位)、三等民(四位)、四等民(五位)、五等民(六、七、八位)とよびならわされていた。五等民の劣位は歴然としており、それぞれの五等民は、特定の一、二等民の村と主従関係を結び、その主人村のために、村内の清掃、道普請、墓掘り、産婦の世話などに携わる。原則として五等民とそれ以外の人びととの通婚は許されない。一、二等民と五等民の村は明瞭であるが、その中間になると、村人の格づけはやや曖昧になる。実際に当事者と他者の評価が異なることもある。

このような五つの横の区分のほかに、一等民の中にあるビルチェ(bilize)とウルン(ulun)という二種の区分が、各等民を縦にさいている。各村々はわずかな例外を除いて、ビルチェカウルンのどちらかであり、かつてはこの両者間の戦争は通常のことであった。現在でも両者は何かにつけて競争しあい、一方の人びとの会合に他方は入ることはできない。

ii 屋敷地による区分

村々間の身分的格差に加えて、村内にはまた土地所有者に関連した身分的格差がある。ヤップの村には、各所に無住の石積みが散在しているが、これらはすべてかつて住居の土台を構成した石積デイフ(dai'uf)である。このデイフは、すべて独自の名称を有し、それに付随する田畑漁場などを伴っている。また伝統的職能、特権もこのデイフに帰属しているため、特定のデイフを相続した男子が村長となる。原則としてデイフは、父から息子へ父系的に相続され、男子の名はそれぞれのデイフの名と関連づけて命名されている。男子がいけない場合にのみ、女子が相続する。しかし子供は自動的に親のデイフを相続するわけではなく、親の死亡時までそれは内密にされ、子が老親の面倒を見るなど、子としての役割を十分果たした場合にのみ、親はそれを子供に伝えるのであって、そうでない時には全く他人にデイフが譲られてしまうことさえあるらしい。このような土地の階位により、同一村内に有力者と無力者が生じてくる。しかしその特権を有するのは、デイフの所有者である男子だけで、妻や子供などその他の成員にはない。

iii 個人としての区分——性と年齢——

ヤップ社会では男性と女性の区分は厳格である。家屋は男の領分と女の領分に、はっきり分れ、彼らがしばしば

りかかって坐るバルコニー上の柱の位置も決まっていた。男女の区分は幼少時よりも、年齢の上昇に伴っていつそう強化されてくる。

男子は年齢により左のような組に分れる。

gumnubut	17.8歳～	上に記した年齢は大体の目やすであり、高いデイフを持つものは昇進が早く、低いものは上昇が遅いので、最高位にまで到達しない。女子の場合には、このような明確な年齢組も入社式もないが、初潮を期としてルゴード(pogud)とな
yangat	20～	
tolou	30～	
masa'eck	50～	
lanimalau	60～	
taa'lang (munsin)	老人	

り、結婚後は夫の階位の上昇に伴って、若干の異なる名称でよばれる。

このようにヤップの村人は、それぞれ何本かの線によって分断されている。このうち、個人の一生を通じて変化するものは年齢のみで、村および性は完全に生得的なものである。デイフの相続は出自によるので、ほぼ生得的ではあるが、全くの他人に譲られることもあるので、一〇〇パーセント生得的であるというわけではない。

(2) 連帯性と孤立性

文化変容と社会組織(青柳)

いうまでもないことであるが、どのような社会集団にも連帯性があり、一方では孤立性がある。したがって先ほどヤップ社会が個別的・孤立的な感があると述べたことは、あくまでも程度の問題である。それではどのように分断された人間関係の上に組み立てられるヤップ社会は、どのような連帯性ないしは孤立性を示しているのだろうか。食と住の関係からこれを眺めてみたい。

i 食の面から

この上なく厳格な禁忌が、食物の耕作、調理およびその摂取をとりまいていく。土地は、父処婚の大家族の長である年長の男性の所有であるが、その中は土地を利用する人の性や年齢に従って、小さく細分化されている。

耕作はすべて女性によって行なわれるが、女性も幼ない時は芋田に入ることができない。初潮を契機として、彼女のために田畑が割り当てられ、ここで彼女は自身のために芋を作り、他の家族成員とは別の火、用具を用いて調理するのである。この時から彼女は母とも兄弟ともいっしょに食事することはできなくなる。

結婚すると、若夫婦は夫の父から田畑の割当をうける。

当初夫のための調理は夫の母が行なうが、やがて妻がこれを引き受けるようになる。しかし芋田の植付、収穫は相変らず夫の母の手によって行なわれる。

子供が生まれると、女性には夫やその他同年輩の男性のための田畑の耕作と調理が可能になる。しかしこの頃になると、年齢組の上での夫の地位が上るので、夫は妻と同じ田畑から得た食物をとることはできなくなる。妻は夫のために別の畑を耕やし、別火で調理し、別の場で食べる。閉経以後には、また別の田畑となり、より年長の男子の芋田の耕作、調理が可能となる。しかし老女は若い女性と一しょに食事することはできない。

一方男の側からいえば、彼自身は農耕に従事しないので、若い時には母に、また結婚後は妻によって、作られた芋を食べることになる。しかし年齢組の上で、彼がマサエク(情報提供者によっては一、二級下)になると、田畑が別になり、妻子とともに食卓を囲むことは不可能になる。タアラランになると母との共食も不可能になるらしい。

このような性と年齢による区分は、田畑ばかりでなく、バナナ、椰子、魚などすべてにわたっている。一つ網でとった魚は、家に持ち帰られるや否や、それぞれ専用の椰子かごに分けられる。一尾の魚を家族が分け合うことはできない。

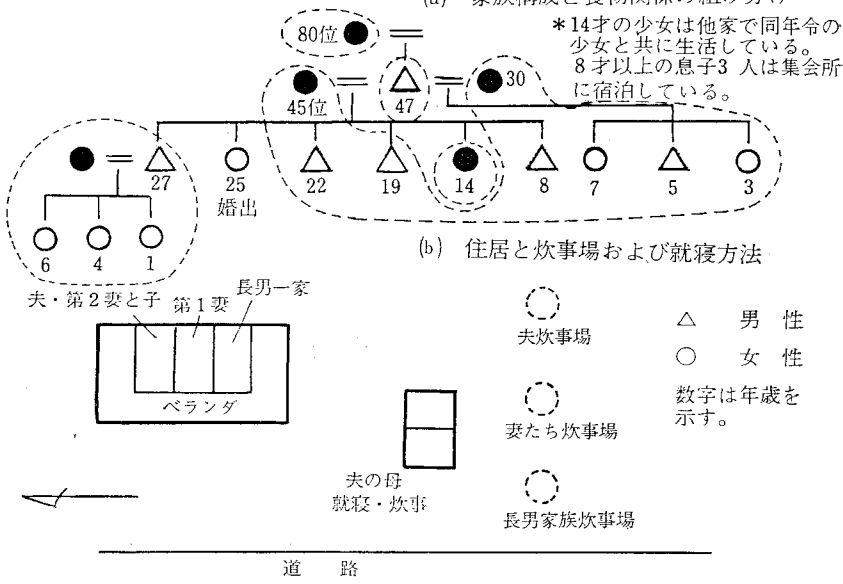
次にあげる第二図は、G村におけるマサエク、ラニマラウ、タアララン各一家族における、家族内の食事のあり方を示したものであり、点線で囲った人びとが、田畑を共通に

し、同火で調理し、共に食事をとっている人びとであり、黒丸がその田畑の耕作者である。一戸の家の庭先に数ヶ所の炊事場があり、妻はそこを行き来して調理をしている。夫や年長者の食物を調理する際には、それぞれ腰みのを変えなければならぬという記述もあるが、G村では現在そこまでは守られていないようであった。

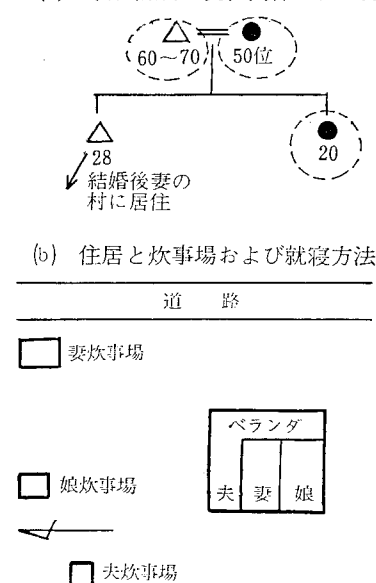
家族外での共食関係も、同様なことであてはまる。前述のように男子はマサエクに進むと自己の土地の中でそれに値する区画を持つようになるが、ラニマラウ、タアラランと階位が進むにつれて、田畑も変わり、それ以外の土地の収穫物を食べず、また自己の田畑の収穫物を他の人びとに食べさせることもできなくなる。そして会食が可能なのは、同階位のもの同士である。上階位のもののが会食し、食物が多すぎて余った際には、そのすぐ下の階位をよんで「捨てる」という形で、それを彼らに与える。

このように、食物に関するきわめて融通のきかない厳格な規則が存在したということは、反面かつてのヤップが非常にゆたかな社会であったことを、裏書きするものであるかもしれないが、しかしこれが人間関係をつなぐ輪の上で大きな障害になったことは想像にかたくない。現在のG村ではマサエク二人、ラニマラウ二人、タアララン四人(うち二人は隣村の住人でこの村に土地があるためにこの成員

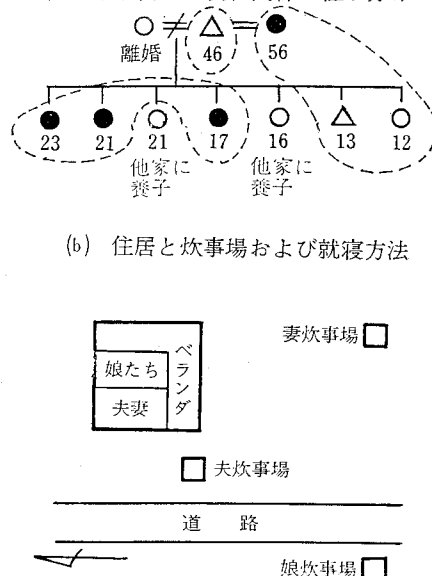
第2図 (1) あるlanimalauの例



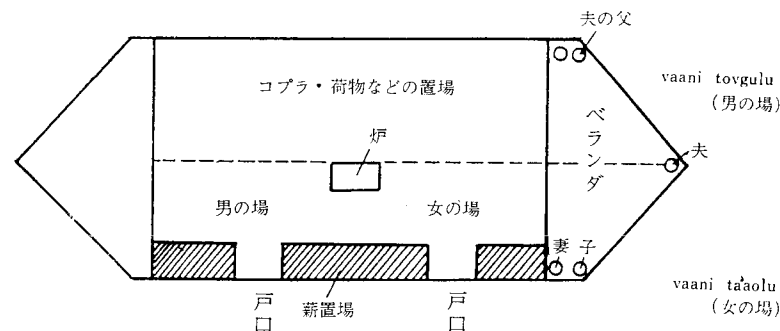
第2図 (2) あるta'alangの例



第2図 (3) あるmasa'ekの例



第3図 ヤップ家屋 (tabinau)



(注) 入口は一方のベランダのみ。点線は図上で男女の場の区分を示したもので、実際には何の境界もない。
○はよりかかって、休む、柱を示す

となっている。したがって実質的には二人である。かつて人口が現在の十倍であった、と仮に想定してみてもその数はたかが知れている。「同じかまの飯を食う」とか「共食」が、人間に情緒的安定性を与え、連帯性を強化する役目を持っていることを考えると、このような規則はそれにマイナスの作用を与えるものと理解してよいであろう。

ii 住の面から

第三図はG村の伝統的な家屋で、前述の通り男女の領分が明瞭に区分されている。食物の面では女子が初潮以後早く母から離れ、以後両親から全く独立してしまうのに対し、住の面では男子がより早く両親から離れる。男児は二歳頃から母を離れ、家の中の男の領分で眠り、また七、八歳頃からは集会所で同輩と眠るようになる。彼らは昼間は自家に来て父と漁に出たり、母と食事を共にしたりしているが、夜には集会所に帰り、生活の本拠はそちらにある。女子は初潮以後は、主屋の近くに別小屋をたてて住み、月のうち一週間近くは月経小屋で過ごす。また以前は妻となつてからも、夫と同一の家屋に住まないという報告もあつたことは前述の通りである。

年長男子の力は強力で、彼の指図によって一家は運営され、子女の結婚のとりきめはじめ、重要な決定は彼の意志によってなされる。二人の妻を有するある例では、二度目

の結婚を決定した際、夫は第一の妻に事前に通告しただけであつたという。村人間の関係もこれに近いもので、相談というよりは、特定の事物を要求する権利を持つ人(ディフの所有によって)とその任務を遂行する義務をもつ人との関係によって成り立っている。散村ではないので、近隣同士が顔を合わせる機会が多いが、彼らを横になぐ絆は、強くはない。

四、おわりに

先の第一図で眺めてきた限りでは、G村がこの六十年間ほとんど変化させることなく、保持してきたヤップの伝統文化には、二つの種類があるように思われる。

一つは男女、および年齢の区別に関連する諸種の慣行である。これは前章のようなヤップの人間関係を根幹としたものであり、ヤップ人自身がいちじるしく価値を置いている事柄であるので、変化は容易には行なわれないであろう。

第二は近代的な貨幣(石貨その他のヤップ固有の貨幣ではなく)を必要とする新しい物品の導入のおくれである。ここでとくにパラオとの比較において取り上げたかったのはこの面である。パラオ人はオラオルを通じて、近代

的な家屋、モーターボートなどを比較的容易に手に入れる。オラオルとは兄弟姉妹関係を絆とする母系氏族相互間の助け合いと、それに加えた友人間の互助の慣行であるが、これは一時に一万ドル以上の金を集めることを可能にする。借りた金は姉妹の夫には返す必要はなく、友人ならいつかまた相手のオラオルの際に借金すればよいのであるから、いわば長期のローンである。サイパンのハイ・コミッショナーで出している広報紙『ハイ・ライト』一九七五年二月一日号は「パラオの古い習慣今も有効」という題で、パラオでは家の建築のためにパラオ・ハウジング・オーソリテイから融資を受けても、建築後直ちにオラオルを行なつてその借金を返済してしまうので、利息が低くてすむこと、またそのために資金の回転が早いので、資金を必要とする人びとがより多く、より早く借り出すことができる」とその利点を述べていた。

オラオルで購入できる物品は、家屋と舟だけであるが、その他の品物に関しては、ンガサウ (ngasau) がある。これはユニオンあるいは日本語でムジンともよばれており、当初は政府によって推進されたものだという。ユニオンは職場単位のものもあるが、村々のレベルでも非常に活発に行なわれており、五〇〇ドルから一、〇〇〇ドル程度まで手軽に融資を受けられるので、諸種の目的のために気軽に

利用されている。O村の例では、隣村K島と一ユニオンを結成し、会員数四・五〇名、加入は本人の自由意志で入金として一ドル支払う。各自の持株数はさまざまであるが、平均して五百株未満である。借入希望金額より持株数が少ない場合には抵当物が設定される。利息は一%、返済期間は二年というように定められ、剰余金は銀行に預金して利子は株主へ配当する。年に二回のユニオンの会合自体が、現在では共に飲み食いし、語りあい、夜は映画を観賞するといった大きな娯楽になっている。たとえ政府指導によるものとはいえ、村単位でこのような制度を活用できるのは、パラオがかつて十人のルバック (rubak) 合議制により村内の行政を行っていた伝統と、ヤップのような分断された人間関係ではなく、むしろ協力型の人間関係を基盤にした社会組織を持っていたことに大きく係わっていると思われる。確かにパラオ人自身、便利なこと、新しい物品に、大きな関心を抱き、高い評価を与える傾向はあるが、パラオの伝統的な社会組織が、それをヤップより一足早く可能にするために作用したであろうことは否定できないであろう。

〔付記〕 本論文は一九七三年八・九月のヤップ・パラオおよび七四年の八月、七五年一・二月のパラオにおける実地調査を基礎としている。調査に当って、ヤップに関しては昭和四十八年度文

部省科学研究費補助金、パラオに関しては昭和四十九年度野村学芸財団学術奨励金、昭和四十九年度観光文化振興基金、および日本民族学振興会より援助を受けている。また本論文に関係のあるヤップ調査でくにお世話になったのは、ロボマン大村長、およびファニフ管区のケニメデ村長、松延宏夫妻である。お名前を記しておれの言葉にかえたい。

註(1) 青柳まちこ ミクロネシア・パラオの兄弟と姉妹——

オラオルの場合——『えとのす』五号 pp.46~52

(2) 高岡熊雄『ドイツ内南洋統治史論』p.498

(3) 同右 p.393

(4) 矢内原忠雄『南洋群島の研究』p.36

(5) 高岡熊雄 前掲書 p.377

(6) 同右 p.384

(7) 同右 p.335

(8) 矢内原忠雄 前掲書 p.525

(9) 同右 p.49

(10) 南洋庁『昭和十年南洋群島島勢調査書』第一表 続表

表 pp.4~8

南洋庁『南洋庁施政十年史』pp.12~14

Trust Territory Dept. of Education, *Micronesia's Yesterday*, pp.114

(11) 南洋庁『昭和十年南洋群島島勢調査書 第一表 統計表』p.4, 11

(12) 矢内原忠雄 前掲書 p.105

(13) 南洋庁『南洋庁施政十年史』p.352

(14) 南洋庁経営となつたのは一九二二年以後であるが、年々六万トン内外の収量をあげている。一九三〇年度の収入は約一一五万円、支出は約三十九万円であった(『南洋庁施政十年史』p.329)

(15) 外務省『日本帝国委任統治行政年報』

(16) 南洋庁『南洋庁施政十年史』p.362

(17) 同右 p.368~369

(18) たとえば在仏山本海軍大佐より田中外務省政務局長あての意見書(大正八年七月十四日付)およびそれに対する板内海軍次官より山本大佐あての機密電報(同年七月二十二日付)(外務省外交資料館所蔵)

(19) 高岡熊雄 前掲書 pp.406~408

(20) 南洋庁『南洋庁施政十年史』p.135~136

(21) 南洋庁『南洋群島に於ける旧俗習慣』

(22) 高岡熊雄 前掲書

(23) 同右 p.363

(24) 矢内原忠雄 前掲書 p.462

(25) 南洋庁『南洋庁施政十年史』p.251

(26) 同右 p.256

(27) 同右 p.262

(28) 外務省 前掲書

(29) 同右

(30) Trust Territory Dept. of Education 前掲書 p.122

(31) G村はヤップ本島の北端に位置し、フィリピン海に面した小村である。G村はヤップの中でも伝統的慣行を

文化変容と社会組織(青柳)

守っている地域といわれているが、首府コロニアから車で一時間程度の地にあり、とりわけ交通不便な遠隔地ではない。

(32) O村はパラオ本島(バベルダオブ島)の北端に位置し、首府コロニアからは、舟で半日以上かかる距離にある。

(33) 牛島巖「ミクロネシア・ヤップ島民族学的調査予備報告」『人類学研究紀要』3 南山大学人類学研究所 p.24

(34) 同右 p.23

(35) Dai Yokim & Francis Defnigin, *Taro Culture as Practiced by the Yapese*, p.63